

「さあさあ、お次は誰の手垢もついていない極上の処女だ。自分でいちからしつけてみたい紳士の方々、いかがかな？」

薄暗いオークション会場でスポットライトを当てられ、舞台の上へと立たされる。

「闇夜を織り込んだような漆黒の絹髪と白磁の肌がたまらない人間のメスだ！」

司会が下卑た声で客たちを煽る。

「ほう、処女か。大人の人間のメスにしては珍しいな……」

「おお、黒髪なんて珍しい……コレクションにほしいな」

「いくらからだ？俺が研究用に引き取ってもいいが……」

客たちは私の品評を始めた。なんでこんなことになったのか分からない。

つい先日までは普通の日常を過ごしていたのに、目覚めたらこの世界にいた。アニメなんかではチートスキルを神様から貰えたりするものだが、そんなものもなく、人買いに捕まりこのザマである。「さあ、皆様とくと御覧ください」

「きゃあっ！！」

ばっつ！！と粗雑な手つきで身にまとっていた麻布は剥ぎ取られ、下着すらつけさせて貰えなかった私の身体は、生まれたての姿のまま客たちに晒される。

「いや……見ないで……見ないでよ！！」

恥ずかしくて頭がおかしくなりそうだった。せめて胸だけはと必死に手で覆い隠そうとするも、首に巻かれた黒革のベルトがじわり♡と熱を帯びた瞬間、身体は不思議な感覚に襲われ、身体が自由が奪われた。

「……っ、なに……！！？」

気がつくとも頭の後ろへ両腕を組まされ、たゆん♡としたおっぱいを突き出すような恥ずかしい格好になっていた。

「いい乳してやがるぜ。しゃぶりてえな」

「おれはあのおっぱいでパイズリしてほしいな……」

客席からの視線がねっとりと肌に絡みつく。
もう、嫌だ。こんな夢だ。

黒い羽の生えた男や獣人、昔話に出てきそうな鬼。

夢の中みたいで現実感がないのに、舐め回すような視線の気持ち悪さだけがやけに生々しい。緊張と恐怖で全身は冷えているのに、身体は素直に反応してしまう。首輪から甘い感覚が波のように広がり、薄桜色の蕾はきゅうと尖り、硬くなっていく。

「んっ♡……はぁ……♡」

いつの間にか甘い吐息が出ていた。

（おかしい、なんで、気持ちいいのわかんない……）

「おや？震えてはいますが、乳首は可愛く反応しているようですな……」

近くに控えていた係の男に、無防備な乳房を下からグイッと持ち上げられた。

「ひゃっ……！？」

そのまま、硬くなった先端をぐりゅっ♡と意地悪く捻り潰される。

「んあっぁ……っ！？」

痛みと同時に胸の先端から背筋へと甘い刺激が走る。

「この通り！ 感度は抜群、開発のしがいがありそうですね！」
「ちが、う……っ、そんなつもりじゃ……っ！」

（声、出ちゃった……！）

驚きと快感、そして何より深い羞恥で、顔が熟れた林檎のように真っ赤に染まるのに、体は震え、甘やかな熱を求めてしまう。

こんな大勢の前で乳首をいじられて感じてしまうなんて……
体が自分のものじゃないようで、恐ろしさと恥ずかしさで涙がじわりと滲む。

「さあ、この可愛らしい人間ちゃんを自分のものにしたい方はぜひご入札を！ 5000ペニーからのスタートです」
会場のあちこちから声上がる。

「7000！」

「8000だ！」

「さあ、どの御主人様のものになるのか！」

欲望にまみれた男たちの声が響き、私の価値が決められていく。
「10000ペニーだ！ そのメスは俺が買う。たっぷりと可愛がつて、

白い肌を俺の色に染めてやるからなあ……」

声が飛び交う中、最前列に陣取っていた巨漢の男が立ち上がった。ぶよぶよとした脂肪の塊のような身体。

全身から発する油と汗の臭いが、ここまで漂ってきそうだ。

濁った黄色の瞳をギラつかせ、舌舐めずりをしながら、ニタニタと笑っている。

男のゲスな視線が、私の胸から腰のくびれ、むっちりとしたお尻へ這い回る。

（嘘……私、あんな人に買われるの……!?!）

無理、絶対無理。

想像しただけで生理的な嫌悪感が込み上げる。出会いがなくて処女なだけだが、初めてののがあんな男なんて死んでも嫌だ。

「現在、10000ペニーです。他にいらっしゃいますか？ では——」
絶望で目の前が真っ暗になった。

「50000」

一瞬、会場が静まり返った。

耳に心地よく響く低音はそれだけで場を支配してしまふ。

声の主を探すと、会場奥のボックス席からこちらを見下ろしている男に視線が吸い寄せられた。

足を組みながら背もたれへと優雅に身を預ける姿は、気品と余裕に満ちていた。白く透き通った肌と滑らかに流れる長い銀髪。

そこから覗く尖った長い耳から、彼がエルフだと分かった。

「おい……あれ、白銀のセイラス様じゃないか？」

「本当だ……なんでこんな場所に……」

翡翠色の瞳が、まっすぐ私を射抜く。

その視線は氷のように冷たく感じたが、何故か目が離せない。

「50000ペニー！ 他にご希望の方は……いらっしやらないようにで

すね。では、こちらの人間ちゃんは、セイラス様にご入札！！」

司会の男が木の槌をカンカンと叩く。呆然としていた私の顔をみて、銀髪のエルフが口の端だけで笑っていた。

舞台裏の薄暗がりへ連れて行かれた私は、この後どうなるのか不安で震えが止まらなくなり、立ち尽くす。

遠くから聞こえるオークション会場の熱狂が、余計に売られた後の悲惨さを物語っているように思えた。

「お嬢ちゃん。運が良かったなあ」

耳元で、司会の男がいやらしく笑った。

何が運が良いのかなんて、聞かなくても分かる。あそこにいた誰よりも、銀髪の男は綺麗だった。

だからって安心できるほど、私の心はお花畑にはなれない。

薄暗い通路を抜けた先には、照明の落ちた控えスペースの中央に銀髪のエルフが立っていた。

見上げなければ顔が見えないほどの長身。私を見下ろす瞳には、獲物を愛でるような、冷ややかな熱が宿っている。

「こちらが、先ほどご落札いただいた人間の娘でございます」

司会者が揉み手をして、卑屈な笑みを浮かべながら彼に擦り寄った。

「ほんとに買っちゃったぞ……」

「あのセイラス様が、人間を飼うなんて……」

周りはざわついていたが、当の本人は気にもせず、目線は裸のまま立ち尽くす私に向けられる。

「酷い扱いだな……せめて服くらい着せたらどうなんだ」
「も、申し訳ございません！　ですが状態は完璧で——」

「そんなもの、見れば分かる」

司会に冷ややかに言い捨て、ため息をつく。

仕草一つで、周囲の空気がピンと張り詰めた気がした。

「あ、あの……」

「黙れ。まだ喋る許可は出してないだろう」

冷徹な声が降ってくる。

その瞬間、首に巻かれたベルトはチリリと熱を帯び、唇は強制的に閉じさせられる。

（しゃべれない……!）

無理に声を出そうとすると、喉の奥から脳みそへと電流のような痺れが甘く突き抜ける。

「んあ……♡」

驚きに目を見開く私を、セイラスは少しだけ愉快そうに見下ろす。「よく効いているようだな。その首輪がある限り私には逆らえない。覚えておけ」

ここに連れて来られる前に、牢屋で首輪をつけられたとき、獣人の男が笑いながら言っていた。

『それをつけられたら最後、ご主人様の命令には絶対服従だ。身も心も全部な』

ぞくり♡と背筋が震える。

「裸のまま連れて帰るのも忍びないな……他の奴らに見せるのも気分が悪い……」

そう言うときセイラスは、自分が羽織っていた黒いビロードのマントを静かに脱いだ。

肩から外し、ひるがえった布が、私の視界を一瞬ふさぐ。

「よし。一旦これでいいだろう。風邪でも引かれたらたまらんからな。人間は弱すぎる」

ぶっきらぼうな言い方だが、肌触りのいいビロードの感触と彼の体温が、冷え切っていた身体を温かく包み込んだ。さっきまで、ものの扱いされていたせいとか、上着を掛けてくれただけでも嬉しかった。「きやつ……!!?」

「大人しくしてろ。靴もない状態で歩いて怪我したいか?」

声が出せない私の喉から、短い悲鳴が漏れる。彼は私を軽々と横抱きし、歩き出したのだ。引き締まった胸板に、顔が押し付けられる。強引ではあったが、その手つきだけは壊れ物を扱うように丁寧だった。服の上からでも分かる、強靱な筋肉の感触。耳を澄ませば、鼓動がトクトクと落ち着いたリズムで刻まれているのが聞こえた。

(顔が近い……)

見上げると、浮世離れた美しい顔がすぐそこにあった。扇のように長くしなやかなまつげ、すっと通った鼻筋、そして薄く弧を描

いた唇はほんのりと赤く色づいていた。

（顔がいいからっていい人とは限らないし……騙されちゃだめ……）

「顔が赤いな」

頭上から、くすりと笑う声が落ちてきた。

「さっきまで大勢に見られていたくせに、まだ、恥ずかしいのか？」
「……っ」

反論したくても、首輪が喉を締めつけて声が出ない。そのことに気づいているくせに、セイラスはわざと意地悪なことを言ってくる。声が出せない代わりに精一杯、鋭く睨みつけた。

「ふふ。小リスのようだな。そんな可愛い目で睨まれても、怖くはないぞ」

その声はからかいと甘さを含んでいて、楽しげな表情を浮かべていた。

「まあ、いい。そのまま私を見つめながら、しがみついてろ。落ちたくなければな」

命令とも冗談ともつかない言葉につられて、私は思わず首に腕を

回す。自分から継りついたのだと気づいた瞬間、胸がドキッとして
しまう。それが恐怖なのか、それとも別の何かなのか……自分では
分からなかった。

馬車の扉が開かれ、セイラスは私を抱えたまま中へと踏み入った。

中は思わず息を呑むほど豪華だった。深い紅のベルベットシート、足元には毛足の長い絨毯。天井から下がる魔石のランプが、とりりとした琥珀色の光を落とし、密室の艶めかしさを助長している。

扉が閉まり、外のざわめきが遠ざかっていく。

代わりに、車輪のリズムと、すぐ耳元で聞こえるセイラスの呼吸だけが世界を満たした。

「座れ」

セイラスはゆったりとシートに腰を下ろすと、私を抱き上げたまま自分の太腿の上へと滑らせた。

男性特有の硬い筋肉の感触が、直接肌に伝わってくる。

反射的に腰を浮かせようとした瞬間、首輪がじり、と熱を帯びた。
「……あつ！」

「無駄だ。いいから、大人しくしてろ」

耳に響く艶がかった声で命じられ、首輪から甘く痺れるような力

が流し込まれる。四肢から指先まで反抗する氣力を根こそぎ奪い取った。

逆らう言葉は喉の奥でとろけ消え、私は糸の切れた人形のように、彼の広い胸板へと崩れ落ちた。

「……怖がらなくていい。私は買ったばかりのペットをすぐに壊すような趣味はない」

「ぺ、ペット……」

彼は悪戯っぽく唇の端を吊り上げ、その笑みはあやしく艶やかだった。

悔しいけれど、見惚れてしまうほどの色気がそこにはあった。

「名前は？」

「……メ、メイカ……です」

「メイカか。悪くない響きだな」

彼は私の名前を口の中で転がすように呟く。至近距離で見下げる翡翠色の瞳は、薄暗い車内でも獣のように鋭く輝いていた。

「私はセイラスだ……呼んでみろ」

「……セイラス様……」

「えらいぞ……いい子だな」

セイラスは満足そうに目を細めると、褒美を与えるように私の頭を撫でた。大きくて冷ややかな手が、髪を梳く。

ただそれだけの行為なのに、背筋がぞくりと震え、甘い痺れが走った。

「な、なんで……私を買ったんですか？」

恐る恐る尋ねる。女性に困っていなさそうな男が、わざわざ私を買うなんて、よっぽど特殊な趣味でもあるのだろうか。

「そうだな。まあしいて言うなら……一目惚れだ。あの汚らしい連中の前で、涙ぐみながら強がる君の姿が、酷く愛らしくてね。私だけのものにして、暴きたくなった」

「えっ……」

「それに……黒曜石のような髪と瞳。それから女性らしい曲線と柔肌もいい……」

セイラスの指先が、私の頬をなぞり、首筋へと滑り降りる。

耳元で囁かれた低音の響きが、直接下腹部にドクン♡と響き、股下の奥がじわり♡と熱を持った。馬車の揺れと共にビロードの生地がするりと素肌を撫でると過敏になった身体を容赦なく刺激してくる。

「ひゃっ……♡」

「私たちエルフには女がないからな。君たち人間の女の身体は、たまらなく唆る」

ビロードのマントの下に手を滑り込ませ、たゆん♡とした白い膨らみを角ばった男性らしい手で、ふわり♡と包み込む。彼のひんやりとした手のひらと、私の火照った肌の温度差に思わず、びくり♡と体が跳ねる。

「あ……んっ！ ひゃあっ……♡」

「柔らかいな……。魔力のない肌というのは、これほどまでに吸い付くものなのか……」

「や、だ……触らないで……っ」

拒絶の言葉を口にした瞬間、首輪が強く締め付けられ、呼吸が詰

まり、言葉が途切れる。

「嘘をつくな。首輪は正直だぞ？」

君の身体は、私を受け入れたがつ

ている」

「ちが、う……っ」

「違わない。……ほら、力を抜きなさい」

セイラスが低く囁くと、首輪からの強制力が私の全身の筋肉を弛緩させた。抵抗する術を奪われ、私は彼の膝にだりとしなだれ掛かることしかできない。無防備になった私を見下ろし、セイラスは意地悪く、けれど甘く微笑んだ。

「怯えるな。あの醜悪なオークに買われるより、私に愛されるほうが幸せだろう？」

「っん……」

オークション会場でみた男に触れることを想像しただけで吐き気がする。それに比べれば、セイラスに触れることは怖いけれど、不思議と嫌悪感がない。

むしろ、快感を拾い、もっと触ってほしいとさえ思ってしまった

いることが恐ろしい。

私が黙っていると彼はゆっくり、むにゆり♡と乳房を揉みしだいていく。

指の腹がむちゅ♡っと肉を押し込み、手のひら全体を包み込むように持ち上げると、柔らかな膨らみはむにやり♡と形を変えて溢れた。

「んあ♡や、ああっ♡なんで……」

馬車の揺れに合わせて、胸が彼の手の中でたわわにたぶん♡と弾む。

「はあ……触れただけで私の魔力を吸い取って、クセになりそうだな。……ほらここ見てみろ」

セイラスは胸から手を離さず、私の顎を軽く押して強引に視線を落とさせた。おっぱいの感触を楽しむように色気ある手でもちゅ♡むにゅ♡と何度も揉み始める。

すると甘いどろっ♡とした感覚がじんわりと流れ込んできて、とろけるような快感に変わっていく。

彼の指先がぷっくり♡と膨らんだ頂点を狙って近づいてきて……
「ひうつ……♡」

「……可愛いな。乳首がこんなに硬くなって……私の指を誘っているじゃないか……」

指の腹で、桜色の敏感な蕾をこりこり♡と転がし、こりゅ♡と円を描くようにじつくりと揉みほぐす。

「あ、あぁっ！ セイラス様、だめ、おかしくなるぅ……っ♡♡」

「なればいい。君は私のペットだ。主人の与える快楽に溺れるのが仕事だろう？」

そう言いながら、彼は人差し指と親指で、硬くなった頂点を容赦なくつまみ上げる。

「ひあぁぁっ♡♡」

甘い悲鳴を上げて、っん♡と軽く引っ張られ、そのままコリコリ♡と丹念に転がされる。

まるで小さな宝石でも愛でるように、何度も、何度も弄ばれるたびに、尖った先端から頭が真っ白になるような快感が波のように押

し寄せてくる。

「つ、ああ♡ ひぐつ、や、ああっ♡」

「いい声だ。……もつと聞かせてくれ」

ぴん♡と爪先で敏感な蕾を弾き、今度はためらいのない手つきで、豊かな膨らみをむにゅり♡と乱暴に鷲掴みにされた。

「ひやうっ♡♡」

さっきまでの優しい愛撫とは違う。彼の手のひらで好きなように形を変えさせられるほど強く揉みしだかれながら、硬く勃ち上がった突起をカリカリ♡と強く引っ搔かれる。

「あつ、んんっ……！」

「ここ、好きなんでしょう？ 顔、蕩けているぞ♡」

耳元で甘やかに囁かれ、私の意思とは関係なく、乳首はきゅっ♡と硬くなって彼に応えてしまう。その反応を気に入ったのか、彼は楽しそうに笑うと、今度は中指と人差し指でこりゅ♡と挟み込む。ぐにぐに♡と弄ばれるたびに、脳が溶けていくような感覚に襲われて、もう彼の腕の中で喘ぐことしかできなかった。

「んああっ！ あ、すごい、いじわるう……ッ♡♡」

生娘の私はセイラスの手練手管に、身体は限界を迎えてしまいそうだった。お腹の奥がきゅんきゅん♡と疼いて、熱い蜜がとろとろ♡と溢れ出してくるのがわかる。

「ふふ、メイカは可愛いな♡次は……」

セイラスは満足そうに喉を鳴らすと、私の髪をかき上げて顔を寄せた。片手で抱き寄せられると、彼の清涼とした森を思わせる香りがふわりと漂い、思わずドキッ♡とする。

「耳が弱いのか確かめてやろう」

「え……？」

彼の冷たい唇が、私の耳に触れた。

「ひやつ……♡」

ちゅ♡と軽い音を立てて、耳たぶに吸い付く。ふにふに♡とした柔らかい部分を、唇でハムハム♡と挟んで優しく吸い上げられた。

「ん……くすぐりたい、です……っ♡」

「そうか？ なら、ここは？」

不意に、熱いぬめりのある舌の感触が、軟骨の複雑な溝をねっとり♡と這い回り、湿った舌先が耳の輪郭をレロレロ♡となぞられる。ぐちゅ♡くちゅ、くちゅ♡じゅるるるる♡じゅぶっ……♡ぺちや……♡♡

「んあぁ♡ や、あぁっ、音が、すごい……♡♡」

「ここも敏感なんだな……それならもつと可愛がつてやろう♡」

セイラスは私の耳をまるで果実でも味わうかのように、窪みの形に沿って舐め回す。

「あっ、あぁっ！ ん……っ♡ひぐっ♡耳い、あついよ……♡」

「耳の裏まで真っ赤だな……」

赤らんだ耳を舌全体で覆い隠して、ぬろぬろ♡としゃぶり尽くすと、彼がわざと耳の穴に向かって、熱い息をふうーっ♡と吹きかけた。

「あぁっ！ だめっ、ぞわぞわするう……っ♡♡」

鼓膜が震えるほどの吐息に、背筋をビリリ♡と電流のような痺れが駆け抜ける。

すると、今度は彼の舌先が耳の穴の入り口をこしょこしょとくすぐる。

奥までは入ってこない。けれど、入り口の産毛を逆立てるような繊細な動きだった。

それが焦らされているように感じられ、気づいたら自分からねだっていた。

「や、あ……っ♡そこ、むずむずして……っ♡……もっ……」

「おねだりできて偉いな、メイカ。耳だけでこんなに感じて……」

よくできましたとばかりに頬にちゅ♡とキスを落とされ、甘やかさがじんわりと広がりキュン♡と胸をときめかせる。

「可愛い♡ちゃんと舐めてやるから♡」

その言葉通り、彼はじゅぶじゅぶ♡とわざと音を立てるように、耳の穴の中に舌を突き入れ、激しく出し入れし始めた。

まるで性器を抽挿するように、ぬちゃぬちゃ♡と湿った水音を響かせながら、私の三半規管をかき乱していく。

「あ、あうっ、ああっ！ 耳、おかしくなるう……っ♡♡」

あまりの刺激に、私の身体はビクンビクン♡と大きく跳ねた。

「あつ、あぁーっ！おく、すごい……♡」

首を振って逃れようとしても、彼の拘束は解けない。むしろ、もかくほどにぬちゃり♡と追撃され、唾液が糸を引き、耳の周りがぐしょぐしょ♡に濡らされていく。

「んんっ♡ あつ、あつ、んく……っ♡ベトベトするう……っ♡」

「ああ、いいなあ……ほんと食べてしまいたい♡」

セイラスは耳たぶをガプリ♡と甘噛みした。

「あひッ、ひいッ！あつ、ん♡」

その衝撃に思わず身体が逃げる。すると私を片腕で強く抱き寄せた。

背中に回された腕の力が強く、私の華奢な身体なんて簡単に折れてしまいそうなのに、なぜか守られているような安心感もあって、余計に混乱する。

「ん……っ、苦し、い……っ♡」

「苦しいのか？……ただ身体は喜んでるみたいだぞ」

空いたもう一方の手が、私の無防備な胸元へと這い戻る。彼はまるで赤子の柔肌を慈しむように、ぷるぷるの♡と頼りなく揺れるおっぱいを優しく、けれど執拗に揉みしだき始めた。

手のひらで包み込むだけでは飽き足らず、指の腹を使って、尖った乳房の先端をくりくり♡とこね回す。先ほどの愛撫で硬く勃起した乳房の突起は、触れられるたびにビクビクと脈打ち、もっと触ってほしいと訴えるように彼の指に擦り寄ってしまう。

「ひゃう♡ あ、だめ、そこお……♡」

「嘘を吐くな。こんなに気持ちよさそうにして説得力がないぞ……ほら、こんなに触って欲しそうにしている」

鼓膜を震わせる濡れた舌でじゅぽじゅぽ♡と緩急をつけながら耳を犯していく。おっぱいはもにゅもにゅ♡とエッチな手つきで可愛がられ、良い場所を的確に捉える指先は乳房の先端を丹念にくりくり♡とこねる。

波のように、同時に、快感を注ぎ込まれ、私の思考回路はパチパチ♡と音を立てて焼き切れてしまった。自分が誰で、ここがどこな

のかすら曖昧になり、ただ彼の腕の中で喘ぐだけの雌になっていく。
「あ、あうっ、ご主人、さまあ……許してえ、おかしくなるう……っ♡」

トロトロ♡にとろけた脳味噌が、快楽で身体を支配してくれる彼を
ご主人さま♡として認識した瞬間だった。

「……っ」

ぴたり、とセイラスの手が止まる。

恐る恐る見上げると、至近距離にある彼の翡翠色の瞳が、ゆらりと暗く、深い情欲の色に濁っていた。

獲物を見つけた肉食獣のような眼差しに、背筋がぞくり♡と粟立つ。それは恐怖ではなく、食べられてしまいたいという、甘い破滅への予感だった。

セイラスは私の震える唇を指先でなぞり、満足そうに目を細めた。「はは。そんなに気持ちよかったのか。いい子だな。……だが、まだ足りないだろう？」

セイラスは私の頬に張り付いた乱れた髪を、優しく払いのけなが

ら囁いた。

その声音はとろけるように甘いけれど、有無を言わせない絶対的な支配者の響きを含んでいる。

「え……？ ひやつ♡」

彼の大きな手が、名残惜しそうに胸から離れ、ゆっくりと下へと滑り降りる。

ビロードのマントの下、露わになった肋骨の凹凸を一本一本なぞるように確かめ、くびれのラインをつう♡と愛おしそうに撫でさする。

細くて長い指先が触れるたびに、火照りきった肌がビクン♡と敏感に反応してしまう。

「メイカの体はどこも心地いいな」

「あ、あつ……くすぐったい、です……っ♡」

その手はお腹からへその窪みを親指でなぞりながら、さらにその下の秘められた場所へと進む。

「ひゃうっ！？……あ、あん♡」

彼の冷たい指先が、太腿の内側に触れた。私はマントしか着ておらず、下着すら身につけていない淫らな姿だということを、改めて突きつけられる。

「や、あ……っ、そこは、だめえ……っ♡」

「隠すな。……ここから男を誘う匂いがしているぞ」

セイラスは私の抵抗など意に介さず、私の足を馬車のシートの上で△字に開かせた。

太腿の内側の、普段は誰にも見せない柔肌を、くすぐるようにすりすり♡と指の腹でじつくりと撫で上げる。

琥珀色のランプの光が、上着の裾から露わになった白い肌と、その奥にあるヌレヌレ♡になった秘裂を艶めかしく照らし出した。

恥ずかしさで太ももを閉じようとするけれど、彼の大きな手がそれを許さない。

「あ……んっ、み、見ないでえ……っ♡」

「嫌がる口とは裏腹に、ここはもう、こんなに濡れているじゃないか」

セイラスの私を弄ぶ中指が、しつとりと愛液で湿った秘裂の割れ目を捉えた。とぷ♡と浅く沈み込むような水音が、静かな馬車の中に響く。

「ひああっ♡♡」

「ほら、私の指を歓迎して、こんなに愛液を溢れさせている」

セイラスは中指の先で、濡れた花卉をゆつくりと左右に掻き分けた。とろり♡と糸を引く透明な蜜を指にたっぷりと絡め取り、あえて中には入らず、入り口のひだだけをなぞるように、にゆりにゆり♡と擦る。

「あ、んっ、んくう……っ♡」

ぬるぬる♡と滑る指先が、敏感な粘膜を擦るたびに、甘い快楽の痺れが腰に広がる。挿れそうで挿れない、じれったい愛撫。ただ、彼の指が動いたたびに、私の身体はビクビク♡と痙攣し、新たな蜜をじゅわり♡と吐き出してしまふ。

「ほら、指が動いたたびに、きゅうつ♡と吸い付いてくる。……可愛いおまんこだな」

セイラスはその様子を、まるでゲームを楽しむかのように冷静な瞳で観察しながら、指先でクリトリスの皮を剥くように、執拗に焦らし続けた。

「あ、あつ、セイラス様、いじ、わる……っ♡」

「……っん♡君がそんないじらしい目で見るからいけない。そうだな。欲しければ、ちゃんと口に出して言ってみろ」

「ほ、ほしい……です……っ♡」

「どんな風にして欲しいんだ？　ちゃんと私の目を見て言え」

彼は私の涙で潤んだ瞳を覗き込みながら意地悪く微笑むと、敏感に膨れ上がった秘豆を、親指の腹でふにゅり♡と残酷に押し潰した。

「いつ、ああああっ♡♡」

「ほら、言えるまで入れてやらないぞ♡」

こりこり♡と硬い豆を転がされながら、焦らすようにびらびらをねっとり♡と指でなぞられる。馬車の揺れに合わせて、彼の手が微妙に位置を変え、ぬりぬり♡と薄紅に染まった陰唇に愛液を擦り付ける。

もう、堪らなかった。

「指っ、指ほしい……っ♡中に、入れてえ……っ♡♡」

「よく言えたな。偉いぞ」

セイラスは満足げに囁くと、とろとろ♡に濡れそぼった膣口に、長くて節のある中指をあてがい、ゆっくりと、けれど確実に押し込んだ。

ドロドロに溶けた蜜壺は男らしい骨ばった指をずぷり♡と飲み込み、にゅちゅ♡にゅちゅ♡と秘奥へと侵入していった。

「んんっ、ああっ！ はいっ、入ったあ……っ♡♡」

「……きついな。やはり、処女というのは格別だ」

彼の異物が私の中をどちゅどちゅ♡と埋めていく。

初めて味わう内側からの圧迫感。けれど、それは不思議なほど心地よく、私の空っぽな器をみっちり♡と満たしていった。

「……っ、ふうっ♡きつくて、熱い……なんて締め付けた」

セイラスは私の内壁、無意識にきゅうつ♡と吸い付く感触に、低く喉を鳴らした。

中指一本が入っているだけなのに、お腹の奥がパンパン♡に張ったような、得体の知れない充足感で満たされる。

「あ、うあつ、動かな、いでえ……っ♡」

「無理だな。君の中はもつと奥まで欲しがっているぞ」

ずぶっ♡ぬちゅ♡ぐちゅっ♡

彼が指を抜き差しし始めると、私の秘所はずぽぽ……♡と受け入れ、その動きに追従した。

ところろ♡に溶けた蜜が潤滑油となり、彼の指は滑らかに、そして残酷なほどの確に、襞のひとつ、ひとつを擦り上げながら私の中を掻き回す。

「ひあっ！　そこ、だめえっ♡おかしくなるう……っ♡♡」

「ここか？　ここが気持ちいいのか？」

セイラスは私の反応を見逃さず、内壁の天井にあるざらついたスボットを、指先を折り曲げてくいつ♡と強く擦り上げた。

「んぎいっ♡♡」

頭の芯が白く弾けるような衝撃。

快感のあまり、身体が弓なりに反り返り、彼の腕にしがみついてしまう。足の指がぎゅっ♡と丸まるほど、そこはイイ場所だった。

「気持ちいいのは幸せだな、メイカ。……イきたいなら、遠慮しないでいい。もっと、快楽に溺れた、だらしのない顔を見せてみる」

セイラスは私を攻め立てる動きを早めた。指をくねらせてスポーツをずろろ…♡と挟り、同時に外側のクリトリスをこりこり♡と激しく潰す。

体を犯される感覚に、蜜口からはとめどなく愛液が溢れた。

ぐちゅ♡じゅぷっ♡ずぷぷっ♡

「あつ、あつ、あぁっ！　くるっ、きちやう、波が、きちやうう……っ

♡♡

「そうだ、私の腕の中で果てろ……っ！」

「あぁっ、セイラス様ぁ！　イツ、いくうっ、イツちやううッ♡♡

♡

限界を超えた快感が、脳天まで突き抜けた。お腹の奥がきゅうつ♡と強く収縮し、まるで彼の指を搾り取るかのように、膣内が強烈

に締め付ける。目の前が真っ白になり、私は獣のように喘ぎながら、大量の蜜と共に絶頂を迎えた。

びちゃ……♡びしゃしゃしゃ、しゃしゃあ……♡♡

「はあつ、ああつ……♡♡ あひいっ♡♡」

ビクンビクン♡と身体中の筋肉が痙攣し、ガクガクと震えが止まらない。

絶頂の余韻で中が収縮を繰り返すたびに、新たな快感の波が押し寄せ、涙とよだれで顔がぐしゃぐしゃになる。

意識が遠のき、視界がぐにやりと歪んでいく。

「良くがんばったな。いい子だ」

セイラスは満足げに囁くと、ゆっくりと中から指を引き抜いた。

とぷん♡と大量の蜜が溢れ出し、私は支えを失ったように彼の逞しい体へと崩れ落ちる。

「おつと……もう限界か？」

セイラスは私の痙攣する身体を、力強く、けれど壊れ物を扱うように優しく抱き寄せた。

彼の広い胸に顔を埋めると、とくん♡とくん♡という力強い心音が、私の乱れた鼓動と重なり合う。

「はう……っ、う……っ♡」

「そんなに気持ちよかったか？ ……さっき、私にいっぱい可愛がられて、とろとろになった顔……すぐくそそられたぞ♡」

セイラスの大きな手が、汗ばんだ私の背中をゆっくりと撫で下ろし、よしよし、とあやすようにポンポンと叩いてくれる。

さっきまであんなに残酷に私を追い詰めていた手とは思えないほど、その愛撫は甘く、優しかった。

「……っん♡はあ……♡」

「やり過ぎたか？ まあいい。家に帰るまでそのまま寝ていなさい……」彼は私がいだけさせたままにしていた黒いビロードのマントを素

肌ができるだけ隠れるように包み直してくれた。

まるで大切な宝物を扱うかのような手つきに、胸の奥がきゅん♡と疼く。

「これで大丈夫だ。私の体温も分けてやるからな……」

ぎゅうっ♡とさらに強く抱きしめられ、彼自身の高い体温がじんわりと伝わってくる。

セイラスは私の頬に自分の頬をすりすり♡と押し付けながら、愛おしそうに髪を梳いてくれた。

「これからもずっと、大事に可愛がつてやるからな……」

彼はそう囁くと、私の汗ばんだ額に、ちゅっ♡と音を立てて労りのキスを落とした。

その温もりが、痺れた身体の芯まで幸せな熱となって染み渡っていく。

薄れゆく意識の中で、セイラスの満足げな吐息が耳元をくすぐり、ぶっん、と糸が切れたように私の意識は闇へと落ちていった――

＊ ＊ ＊

腕の中で、メイカが静かに寢息を立てながら眠っている。

涙で濡れた頬、乱れた黒髪、そしてはだけたマントの隙間から覗く、執拗に弄って赤く熟した乳首。その全てが先ほどまで私が与えた快楽に溺れていた証拠だった。

「……やりすぎてしまったか」

小さく呟き、彼女の額に張り付いた髪を払う。

魔力を持たない人間の身体は、私の指一本で壊れてしまいそうなほど華奢だ。

だが魔力の器として予想以上に優秀だった。

私の膨大な魔力を貪欲に飲み込み、快楽へと変換して吸い尽くしていた。

最近、体内で燻っていた重苦しい魔力溜まりが、メイカの肌に触れ、中を掻き回しただけで嘘のように霧散している。

「ふっ……まだ最後まで繋がってもいないのに、この快感とはな……愛らしい捕食者だ」

エルフの中にも人間を好んで可愛がるものは多いが、これまであまり飼おうと思ったことはなかった。

今回もただ、暇つぶしに足を運んだオークションだった。しかし会場でメイカを見た瞬間、本能がこれは私のものだと呼んでいた。

不安そうにしているメイカを他の誰にも触れさせたくなかった。今すぐ攫って、自分のものにしたいと堪らなかった。

自分の手で愛でて、守ってやりたかった。その美しい黒瞳に私を映して欲しかった。あの子の全てを私にだけ向けさせたい。

い。こんなに心が躍るのは長いエルフの生の中でも初めてかもしれない。

「皆、自分の所の人間が一番だと愚かな自慢をするが……今ならそ

の気持ちちが痛いほどわかるな……」

馬車がゆっくりと速度を落とし、やがて完全に停止した。砂利を踏む音と共に、従者の声が外から響く。

「旦那様、屋敷に到着いたしました」

「……ああ」

メイカを包んでいるマントをできるだけ素肌が見えないようきつちり直してやった。

この柔らかな肌を外気に晒すのも、他人の目に触れさせるのも我慢ならない。

特に私の愛撫で上気した頬や、情事の熱を孕んだ無防備な姿など、誰にも見せてやるものか。

「……ん……」

外の空気に反応したのか、メイカが小さく身じろぎをして私の胸に顔を擦り付ける。

その無邪気な仕草に、愛おしさで胸を貫かれたような衝撃が走った。

(……くっ、なんて顔をするんだ)

湧き上がる庇護欲を噛み締め、私は彼女を軽々と抱き上げると馬車から降り立った。

エントランスの前には、執事をはじめ数人のメイドたちが整列して頭を下げていた。

私が彼女を抱えているのを見て、古株の執事が目を丸くし、恭しく一歩前に出る。

「おやおや、随分と可愛らしいお土産ですね。……わたくしめがお運びいたしましたでしょうか？」

老執事が慣れた手つきで手を伸ばしかけた瞬間、どす黒い独占欲が湧いた。

「触るな。彼女に触れてもいいのは私だけだ……」

「おっと……」

鋭い声に、執事は大して驚きもせず、面白がるように手を引つ込めた。

「自分で運ぶ。お前たちの手は無骨すぎて、この子の肌を傷つけそう

だ」

「左様でございますか。ですが、思いつきでいきなり人間を飼う旦那様より、慣れた私どもが世話したほうがその娘も幸せでは？」

「……………そんなことはない。この子は……………私の番のようなものだ」
痛いところを突かれ、バツが悪くなり視線を逸らした。

確かに人間を飼うつもりなど全く無かった。

だが、不思議と違和感はなく、むしろ腑に落ちたような感覚だった。

獣人たちは雄雌で運命的に惹かれ合い番になるというが、今の感覚はそれに近いのかもしれない。

「ほう……………？ 『人間などひとりで生きていけない愚かな生き物だ』と切り捨てていた旦那様が、まさか番と仰るとは」

「……………うるさい。一目見た瞬間、本能が叫んだんだ。……………この子は私
のものだと。だから、一生大事に手元に置いて愛でてやることにした」

そう言い切ってメイカを抱き直すと、執事はやれやれと肩をすく

めながらも、どこか嬉しそうに目を細めた。

「あの氷のようだった旦那様が、そこまで熱を上げられるとは。……長生きはするものですね」

「減らず口を叩くな。……部屋の手意はできているんだろうな？」

「ええ、勿論でございます。旦那様の寝室のお隣の日当たりのいいお部屋をご用意しました」

「それならいい。この子が気に入ってくればいいが……」

「さようでございますね」
私は鼻を鳴らし、生温かい笑みを向けてくる使用人たちに背を向けた。

コツ、コツと石畳を歩く音が廊下に響く。腕の中のメイカは、周囲の騒ぎなど知る由もなく、幸せそうな寝息を立てている。

「……可愛い奴だ」

誰にも渡さない。誰にも触れさせない。

この腕の重みだけで、今の私は世界を手に入れたような気分だった。

寢室の大きなベッドにメイカを横たえようと、彼女はシーツに沈み込み、心地よさそうに吐息を漏らした。

「さて……汚れた身体を綺麗にしてやらねばな」

着させていたマントを脱がせると、露わになった白い肌は、私の愛撫を受けてほんのりと桜色に染まっている。

特に、先ほどまで私が弄り回した胸の頂は、未だ興奮を帯びたまま可愛らしく尖っていた。太腿の内側には、溢れ出た大量の蜜が乾きかけ、べとり♡と張り付いて彼女の乱れぶりを物語っている。

「ふふ。……よく感じていたからな」

メイカの快樂に溺れている様を思い出し、愛しさに思わず笑みが溢れる。

自身の下半身が疼くのを感じながら、私は蒸しタオルを手を取った。

普段ならメイドに任せる仕事だが、今の私には、彼女に触れさせることすら惜しい。

この柔肌に触れていいのは、私だけ。彼女の世話は、髪の毛の一本に至るまで私が全てやってやりたい気分だった。

私はタオルを彼女の首筋に当て、ゆっくりと下へ滑らせた。鎖骨のくぼみ、胸の膨らみ、そして敏感な蕾の上を、熱を含んだ布で優しく撫でる。

「ん……」

彼女が身じろぎをするたび、その反応に誘われるように私の指先がぴくり♡と疼く。

「ああ、そんな反応をされたらまた可愛がりたくなってしまうじゃないか……」

それでも、なんとか湧き上がる衝動を押さえつけ、最も汚れている下半身を綺麗にしていくな。彼女の足を少し開かせ、内腿に張り付いた蜜を丁寧拭き取る。

とろり♡と乾きかけた蜜を温かい布でなぞると、ぬちゅ♡と粘り気のある愛液が糸を引く。

ねっとりとした愛液は消え、ぷっくり♡と赤く熟れた愛らしい蕾

は私の暗い欲求を刺激する。

秘裂の周りを拭うとき、気づいたらわざと指先で軽く粘膜をなぞつてしまった。

「……っん♡」

ぴく♡とメイカの体が反応し、拭ったばかりの場所からまたじわりと蜜が滲むのを見て、私は満足げに喉を鳴らした。

（ああ、少し触れただけでこれだ……この子は本当に快楽を受け入れるためにつくられたような身体をしている……）

その後も丁寧な身体を拭き清め、肌触りの良いシルクのネグリジェを着せてやる。

すべてを終える頃には、彼女はすっかり清潔になり、競売で見たときより、何倍も美しくなった。

「おやすみ、私の可愛いメイカ」

私は彼女の柔らかい唇に、軽い口づけを落とした。

明日の朝、彼女が目覚めたら、またたつぷりと可愛がつてやろう。清潔になったこの身体を、また私の手で甘く汚し、まだまだ初々

しい秘所をじっくりとほぐしてやるのだ。

そして私の欲望をすべてを彼女のトロトロ♡になった温かな蜜壺に注ぎ込んだらどうなるだろう。

「初めては痛いと思うから、丁寧に扱ってやらねば……」

壊さないように、優しく。だが、どこまで耐えられるのか、確かめたくもなる。

「……ふふ。この身体を前にして理性がどこまで持つかは分からない……」

その時どんな風にメイカが乱れてくれるのか、今から楽しみで仕方がない。

「……ん……」

ふかふかとした柔らかい感触と、微かに漂う甘い花の香りに包まれて、私は重いまぶたを持ち上げた。

（ここ……どこ……？）

ぼんやりする視界に映ったのは、馬車の中よりもさらに豪華な天蓋付きのベッドと高い天井。窓からは朝日が差し込み、レースのカーテンが風に揺れている。絵本に出てくるお姫様の部屋そのものだった。

「気がついたか？」

不意に、鼓膜を甘く震わせるバリトンボイスが響く。ハツとして顔を向けると、ベッドの脇の椅子に、セイラス様が優雅に足を組んで座っていた。

ゆったりとしたシルクのガウンを纏い、手には湯気の立つティーカップを持っている。朝の光を浴びたその姿は、同じ生き物とは思えないほど美しく、そしてどこか艶めしかった。

「セ、セイラス様……？」

「おはよう、メイカ。……昨日はよく眠れたようだな」

カップをソーサーに置くと、立ち上がって私の元へ歩み寄ってきた。

その動きだけで、昨日の馬車での記憶が呼び起こされる。

長く美しい指に弄ばれ、恥ずかしい喘ぎ声を上げて絶頂に達した感覚。それらが一気にフラッシュバックし、身体の奥がじんわり心と熱くなる。

「あ……っ！おはよう、ございます……っ」

カッと顔が熱くなるのを感じて、私は慌てて布団を引き上げた。

自分の身体に目を落とすと、昨夜の裸にマント姿から一転、肌触りのいい滑らかなシルクのネグリジェを身に纏っていた。

「あれっ………服着てる??」

「ああ、流石に裸で生活させる趣味はないからな。私が着替えさせ

た」

「えっ！ありがとうございます……ございます?」

服を着られたのは嬉しいが、大の大人が異性に着替えさせられる

なんて子供みたいで恥ずかしい。

（まあ……裸で過ごさずに済んだだけマシか……）

セイラスは私の動揺を楽しむようにベッドの縁に腰掛けると、長い指先で私の頬をツンツン♡とつついた。

「礼には及ばない。君の主人として当然の務めだ」

指の腹が、頬から顎、そして喉元へと、つう……♡と滑り落ちていく。

「それに……君の寝顔があまりに無防備で愛らしくてな。つい、世話を焼きたくなってしまったんだ」

「っ……………」

「他の誰にも、この柔らかな肌を触らせたくなかったしな……」

ネグリジェ越しの胸元から足先までを、ねっとり舐め上げるように見つめる。

「は、はずかし、い……です……そんな目で見ないでください……」

昨夜の快感が身体のコで蘇り、私は頬をさらに赤らめ、布団を握りしめたまま小さく身を縮こまらせた。

「ふふ、朝からいい反応だ。羞恥に染まるその顔も、たまらなく唆る」
セイラスは満足げに目を細めると、ゆつくりと顔を近づけてきた。
チュッ♡

「んっ……」

唇に触れるだけの柔らかなキス。ほんの一瞬なのに、鼓動がバクバク♡と高鳴る。

「さて……まずは朝食にしようか。私の可愛いお姫様」
「……はい」

甘いキスの余韻に頭がぼんやりとしたまま頷くと、セイラスは愛おしそうに見つめてきた。私の困惑など気にも留めず、ベッドの端に腰掛けると、私をひょいと抱き上げた。

「わっ!？」

「君は少し痩せすぎだ。私のものになったからには、もう少しふっくらとしてもらわないとな」

当然のように私をお姫様抱っこし、そのまま部屋の奥にある窓辺のソファへと歩き出す。突然の浮遊感に、私は慌ててセイラスの首

に腕を回した。

薄いシルク越しに伝わる彼の体温と、首筋から香る清涼な森の香り。至近距離にある美しい顔と漂っている彼の色気に、心臓がバクバク♡と騒いだ。

「あ、あの……自分で歩けます……っ」

「遠慮するな。こうして私の腕の中に収まっているメイカも愛らしいぞ」

反論する隙もなく、私たちは豪華なカウチソファへと到着した。深く腰掛けると、私を下ろすことなく、そのまま自分の太腿の上にちょこんと座らせた。

「えつと……下ろして貰えますか？」

「こっちの方が食べさせやすいだろう？」

私は広い胸板に背中を預ける形になり、すっぱりと包み込まれてしまった。まるで幼子の気分だった。目の前のテーブルには色とりどりの果物や焼き立てのクロワッサン、そして湯気の立った温かいスープが用意されていた。けれど、食事よりも先に気になってしまっ

たのは、お尻の下にある、太ももの感触だった。

(……ち、近い……っ)

薄いシルクのネグリジェ一枚越しに、筋肉の硬さと体温が彼の逞しい胸板に密着し、ダイレクトに伝わってくる。

もう、逃げ場なんてどこにもない。

「ほら、口を開けて」

私の緊張など意に介さず、セイラスはスプーンですくったスープを私の口元へ運んでくる。

「じ、自分で食べま……」

「いいから。……あーん♡」

親鳥がひなに食べさせるような仕草だが、その瞳は慈しみながらも捕食者のように鋭く光っていた。それは暗に逆らうことを許さないと断言しているようだった。

私は観念して、パッと口を開けた。

スープの野菜の自然な甘みと温かさが口の中に広がった。空っぽの胃に染み渡る美味しさに、思わずほうっと吐息が漏れる。

「ん……おいしいです」

「そうか。お前の口に合ってよかった」

セイラスは嬉しそうに目を細めると、今度は一口サイズにちぎった白いパンを指で摘み、私の唇に押し当てた。

「ほら、これも食べてごらん。ふわふわで甘いぞ」

パンを食べようと口を開くと、指先がわざとらしく唇や舌に触れた。

「んっ……」

「ふふ、可愛いらしい食べ方だ。……まるで小動物だな」

「セイラス様が、そうやって食べさせるから……っ」

「ああ、すまない。あまりに愛らしくて、つい」

ちっとも悪びれていない様子で、次々に食事を口へと運んでくる。

「ほら、最後だ。この果物もうまいぞ」

拒否権はないと言わんばかりに、果実を持った冷たい指先が、唇をくにくに♡と押してくる。

抵抗することもできず、私は小さく口を開いた。

「あ……ん……」

シャクツ、と果実を噛むと、甘酸っぱい果汁がじゅわりと口いっぱいに広がる。

「んっ……おいし……」

この世界に来てから初めてのまともな食事。

空っぽだった胃袋だけでなく、不安で張り詰めていた心までが、じんわりと温かいもので満たされていくようだった。

誰かにこうして徹底的に世話を焼かれることの、甘美な心地よさが、不思議と安心感をもたらしている。

（なんだか……すごく、落ち着く……）

無意識に筋肉でがっちりとした胸元に背中を預け、リラックスしていた。

「ふふ。ちゃんと食べれて偉いな。いい子だ」

私の頭上から、満足げな笑い声が降ってくる。

セイラスは嬉しそうに目を細め、私の頭をよしよし♡と撫でた。
（もう……セイラスって私のこと子供かペットだと思っただけ？ い

や実際そう思われてるのか……)

そんな風に少し拗ねていると、頭を撫でていた手のひらが、ずりとなぐりジエの下に滑り込み——私の無防備な太腿に、直接触れたのだ。

「……ひゃっ!?!」

私は思わず小さく悲鳴を上げて、太ももをぎゅっ♡と擦り合わせた。

そのあまりに生々しい感触に、ふと違和感を覚えた。

(あれ……?)

いつもならあるはずの下着のゴムの締め付けもなく、お尻や太ももが触れているのは、さらさらとしたシルクの感触だけ。

(う、嘘……穿いて、ない……!?!?)

今まで裸同然だったせいで気づかなかったが、服を着たことでシヨーツやブラを付けていないことの違和感が私を襲った。動きたびに、さらさらとした生地が敏感な太ももの内側や、昨日散々弄られた秘所を直接撫でる。下半身がスーッとできて、なんとも恥ずか

しい感覚に襲われてしまう。胸元も締め付けがなく、ぷるぷる♡と揺れるたびに尖った乳首が生地に擦れて、ちりちり♡と痺れた。

「……ん？ どうした、急に顔を赤くして」

セイラスは私の動揺に気づいているくせに、わざとらしく不思議そうな顔で覗き込んできた。指の腹が、敏感な内腿の柔肌をゆっくりに、と手のひらをなじませるように撫でられる。

「太もも……なんで、なでて……♡」

「うん？……また、いやいやか？」

その声には甘さはあるつつも拒否は許さない。逃げようとする私の腰を、逞しい腕ががっちりとはールドする。

「そ、それに、下着も、穿いてなくて……っ……」

蚊の鳴くような声で訴えると、彼は「ああ」と事もなげに頷いた。「必要ないだろう？」

「ええっ!？」

「君は私のものだ。……私が触れたい時に、邪魔な布切れなど無い方がいい」

段々と冷たさと情欲を帯びた手はじわり♡と湿り始めた蜜口へと近づいていく。

「それにメイカはすぐにおまんこをグジュ♡グジュ♡にして下着を濡らしてしまうだろうからな。君もヌレヌレ♡の下着をずっと付けていたくはないだろう？」

「そ、そんなあ……っ♡」

耳元で囁かれる、あまりに淫らで酷い言葉。

けれど、否定できない事実を指摘される背徳感に、酷いことを言われているはずなのに体はとろり♡と甘く疼いてしまう。

「ほら、口元についてるぞ」

「えっ、あ、ふきま……」

「そのままでもいい」

私が抗議するより早く、セイラス様が顔を寄せた。

ちゅっ……♡

唇に残った果汁を舐め取るように、彼が口づけを落とす。舌先で唇の端をぺろり♡と舐められ、そのまま深く吸い付かれた。

ちゅぷ、れろ、んちゅ……っ♡……ちゅ、んっ、ちゅ、んはぁ♡……
ちゅるる、ちゅ、れろ、れろ……ちゅぷ♡

「んんっ！……あ、んっ……♡」

「甘いな……。果汁のせいかな、それともお前自身が甘いのか」

唇を離れたセイラスは、熱っぽい瞳でとろん♡とした私を見つめると、太腿に置いていた手をさらに奥のずぶ濡れの秘所へと滑り込ませた。

「もう、そんないやらしい顔をして……キスだけじゃなくて、ちゃんと下の口も可愛がつてやるからな♡」

「あっ……だめえ……っ♡」

ずるり♡

ネグリジェの裾から侵入した彼の指が、無防備な蜜壺に触れる。キスだけで柔らかくほぐされ、なんの抵抗もなく彼の骨ばった指がずぷり♡ずぷりと粘膜に吸い込まれていく。中でうごめく指の感触は、ゴツゴツとしているのに不思議と優しく、私の敏感なひだを丁寧に広げていく。

「んっ……あ……っ♡」

「ふふ、いい具合だ。中もとろとろに溶けている」

セイラスは私の反応を楽しむように、指を少し曲げて内壁をこりっ♡と掻いた。

「ひゃうっ!?!♡」

「ここか? ここがいいのか?」

「あ、あつ、そこっ……っ♡ だめっ、変な声……でちやうう……っ♡」

「好きにだしなさい。メイカの甘い啼き声は聞いてて気分がいい」
ジュポポ……♡ クチュ、グチュッ、ズププ……♡

いやらしい水音が部屋に響く中、彼の指使いは徐々に激しさを増していく。

快楽は頂きに近づき、頭が真っ白になりかけたが……

不意に彼の手が止まり、中からずるんっ♡と引き抜かれたのだ。

「さて……指での挨拶はこれくらいにして……まだ、イったら駄目だぞ♡」

「えっ……なんで……♡」

欲しかった快感が得られなかった喪失感に、身体が震わせていると、耳元から悪魔のような囁きが降ってくる。

「……ほら、自分の手で裾を持ち上げなさい」

「えっ……？」

「足を開いてネグリジェを持ち上げて、いやらしいところがしっかりと見えるようにしなさい」

「……は、はずかしいです」

「命令だ。ちゃんと御主人様の言うことは聞かないとダメだろう？」
すると、その瞬間首に巻かれたベルトが熱を持ち、私の意思に反して、体は命令通りに動こうとする。

「あ……っ、また、からだ、が……勝手に……っ！？」

「メイカ……私に可愛がられるのを拒否するな。……あんまり首輪は使いたくない」

そう言うとは彼は、私の唇を塞ぎ、舌を包み込むように吸い上げ、じゅっじゅ♡と熱い何かを注ぎ込むようなキスをしてきた。

「んんうーっ!?!?♡」

口の中に、熱くてとろり♡とした何かが流れ込んでくる。

ちゅんっ♡じゅぷじゅぷ……♡……ずろろっ♡………じゅるる

♡

舌に絡みつくそれが、じわじわと頭の奥へと広がっていく。

「ちゃんといい子になれるか?」

「ふぁ……い♡♡」

(なにこれ……頭、ふわふわして……気持ちいい♡♡)

血管という血管に、甘い痺れが駆け巡る。

恥ずかしいとか、嫌だとかいう感情が、キャンディーのように甘く溶けていく。

「ああ、魔力酔いしたのか? 気持ちいいだろう?」

唇を離れたセイラスは、とろろん♡と白目を剥きかけた私の顔を見て、満足げに微笑んだ。

そして、私をソファの背もたれに預けさせ、椅子から降りて、ふかふかの絨毯が敷かれた床に優雅に座った。

見上げる翡翠色の瞳は、獲物を鑑賞する捕食者の色をしていた。

「さあ……見せてごらん♡可愛いメイカならできるな♡」

「……ひゃい♡」

私の手は、もう抵抗することなく、するりとネグリジェの裾を掴んで腰まで捲り上げた。

そして、さらりとしたシルクの感触が消えた太腿を、ゆっくりと左右に大きく広げていく。

「いい子だ♡……もっと広げような」

「……あい♡」

快楽に溺れていても羞恥心はあるが、それでも主人に褒められたくて、もっとも恥ずかしい場所を彼に突き出すようにM字に開脚させられてしまう。ぱっくりと割れた秘所からは、先ほどの指での刺激で溢れた愛液が、とろろり♡と糸を引いて垂れていた。

「あう……みて、ください……♡」

「ふふ、素晴らしい眺めだ。……ごらん、君のおまんこがヒクヒクと動いて、私に早く舐めて欲しいと誘っている」

「ち、ちがう……っ、これは、セイラス様が……っ♡」

「そうだな……私のせいでこうなってるんだ。ちゃんと舐めてやるから安心しろ♡」

セイラスは愉悦に口元を歪めると、開かれた股の間に顔を埋めるようにして潜り込んだ。

「ひやつ！？ セイ、ラスさま……そんな……っ！？」

「じつくりと味わわせてもらおうか」

ズズッ……♡

鼻先が、ぐじゅぐじゅ♡に濡れた秘襞に押し当てられる。

スウーッ、と深呼吸をする音が聞こえ、私の匂いを胸いっぱい吸い込んでいるのが分かった。

「ん……いい匂いだ。雌の甘い香りがする」

「やあっ！ 嗅がないでえ……っ」

「照れることはない。柔らかな黒毛も愛らしいぞ♡」

淡いほわほわ♡とした下の毛をツン♡っと引っ張る。

「……っん♡」

「それじゃあ……涎を垂らして待っている蜜壺をいただく」
直後、熱い舌が、敏感なクリトリスを一舐めにした。

ペロリ……ッ♡

「ひあああぁっ!?!♡」

ビクンッ!と腰が大きく跳ねる。

けれど、私の臀部は彼の手でガッチリと掴まれ、逃げるなどできない。

「ん、んんっ……ちゅ、じゅる……っ♡」

「あ、あっ、ああっ!♡そ、そこっ、だめえっ!♡」

セイラスの舌は、まるで熟れきった果実を味わうかのように、執拗にクリトリスを転がし、愛液を啜り上げる。

レロ、レロレロ……ッ♡ちゅるる……♡

「んう……っ♡はひゅ……っ♡」

「甘い……やはり、お前の蜜は最高だな……っ」

「や、やだぁっ……そんな、き、汚いところ……っ!♡」
彼が舌を動かすたびに、くちゅくちゅ♡という水音が部屋中に響

き渡る。

「汚くなんてないさ。君の体はどこもかしこも甘い……」

高貴なエルフであるセイラスが、私の股間に顔を埋め、夢中で貪っている。その背徳的な光景と、ダイレクトに脳に響く快感、頭がおかしくなりそうだ。

んむ……っ、ちゅううう……っ♡

「ひいっ！♡す、吸わないでえっ！吸われ、たらっ……おかしく、なるう……っ♡」

じゅるっ、ちゅぷ……♡じゅば、じゅぷう……♡チュポンッ、ズズッ……♡

「んっ、はっ、ふう……っ♡まだだ。もっと奥まで味わせろ」

私の抗議など意に介さず、さらに舌先を尖らせると、蜜を溢れさせる膣口の中へとねじ込んできた。

ぬちゅ……♡ずぷ、れろお……ッ♡

「あひいひいッ！？♡なか、入って……るう……ッ♡」
「ん、ん……っ♡」

舌で中也掻き回される感覚は指とは違う、熱さと生々しさがあつた。

ザラリとした舌の感触がナカを擦るたびに、身体の芯から痺れるような快感が駆け抜ける。

「セイラス、さま……っ、もう、だめっ……ゆるし、てえ……っ♡」

「ああ。私の舌で存分にイきなさい」

下から見上げる瞳は、情欲でとろりと濁りながらも、私を支配する強い光を放っていた。

じゅるるるるっ！！♡れろ、レロレロレロ……ッ♡

「あ、あ、あっ、あーっ！っ！！♡イクっ、イっちゃうううーっ！！♡♡」

ビクンッ、ビクビクンッ！♡

絶頂の波が全身を駆け抜けて、腰がガクガクと震える。

股のあいだから、とろとろの蜜がだらり♡とソファの上へ落ちていく。

「はあ、あ……っ、んう……っ♡は、ひう……っ♡」

ごくくり♡と喉を鳴らす音が、私の足のあいだから聞こえた。

「……ん、ふう……っ」

口の端についた透明な蜜を舌で舐め取り、指先についた雫も惜しそうに唇へ運ぶ。

「……っん♡他の人間の体液など飲みたいと思ったことはないが、君の愛液はたまらないな」

割れ目を最後にぺろりと舐めてから上体を起こす。柔らかなクッションにもたれ、ぐったりとしていた私の身体を筋肉質な膝の上へ抱き寄せた。

「喉が渴いただろう？」

サイドテーブルのグラスを取り、冷えた水をメイカの唇にそっとあてがう。

「……ん、んく……っ」

続けるようにグラスの縁を咥え、こくこくと水を飲み下す。乾いた舌が潤っていくたび、さっきまでの快感は甘い気怠さへと変わっていった。細い喉が上下するたびに、セイラスの翡翠色の瞳がとろり

♡と細まる。

「ふふ、そんなに急いで飲まなくても、誰も水を取らない」

「だ、だって……セイラス様が、朝からあんなこと……」

濡れたままの口元を袖でごしごしと拭き、真っ赤な頬を硬い胸元へと押し付ける。

「メイカが気持ちよさそうに鳴くから、つい夢中になっただけだ。君も乗り気だっただろう？」

「……っん♡」

恥ずかしくてたまらず顔を伏せると、機嫌を取るように頬にちゅ♡とキスを落とされた。

「ふふ。それに君は私のペットなんだから飼い主が可愛がるのは当然だろう？」

「もうっ……意地悪です」

セイラスはグラスをテーブルに戻すと、ネグリジェの裾を指先でつまんだ。

シルクの生地が股のあたりにぐっしより♡と濡れ、重たく肌に張

り付いている。

「このままでは風邪を引くな。ネグリジエから着替えようか」

「き、着替えたいです……っ。それに、今度はちゃんと……下着、着きたいです……」

握りしめていたシーツから指を離し、か細い声で訴える。

汗と蜜で火照った素肌を、冷たい空気が撫でていく。

「さっきも言っただろう。何も着けない方が、すぐに君を愛でられる」

「でも……恥ずかしいです。歩くだけで、さっき触られたところ……擦れて、変な感じになって……」

視線が自分の胸元に落ちる。

ブラの締め付けがないせいで、柔らかな膨らみが布の中で心許なく揺れている。

「それに胸が揺れるのも、あそこが寒いのも嫌なんです。」

胸も、脚のあいだも、少し動くだけで空気がスッと入り込んでゾワゾワ♡する。

羞恥と心細さが混ざった感覚を振り切り、メイカは上目遣いでセイラスを見上げた。翡翠色の瞳を真正面から捉え、瞼を少しだけ伏せて、できるだけ甘く縋るような表情を作る。

「揺れるのは、それはそれで……見ていて悪くないがな。……ただ、寒いのはよくない、のか？」

セイラスが口元を引きつらせ、視線を胸から下腹へとさまよわせる。平静を装っているのに、耳の先がじわり♡と赤くなっているのが分かった。

（今……ちよつと照れた……。もう少し、押せばいいけるのでは？）
メイカはそつと距離を詰めた。手のひらを男らしい胸板に添え、身体を預けるように背伸びをする。

「セイラス様」

名前を呼んで一呼吸おき、勇気を振り絞る。

（昨日あれだけされたんだし……大丈夫）

柔らかな唇をセイラスの口元へそつと合わせた。

ちゅ……♡

一瞬だけ触れて、すぐ離れる。

頬は赤くなり、心臓はバクバク♡と速まり、恥ずかしさと緊張で胸の奥がぎゅっ♡と縮んだ。

「お願いです……いいでしょ？ セイラス様」

できるだけ舌を転がすように、甘ったるい声で囁く。わざと語尾を少し伸ばし、胸元を両腕で抱え込んで、首をこてん♡と傾けて上目遣いで見上げた。

「メイカ……」

セイラスが、信じられないものを見るような顔をする。いつもの余裕の笑みがどこかへ消え、翡翠色の瞳が揺れた。

「わかったから……」

観念したように息を吐いたあと、セイラスは視線をそらし、片手で口元を覆った。

「っ……ああ、可愛すぎる♡……反則だ……」

長い指の隙間から、熱のこもった吐息が漏れる。

「そんな甘やかな顔で……自分からキスまでしてくるなんて……」

んぐっ♡とうめき声を上げながら、椅子の上で小さく身をよじるように悶絶する。

（なんか……すごい効いてる）

「おねだりまで覚えるなんてメイカは賢いな♡」

「じゃあ下着つけてもいいですよね？」

メイカが胸の前で指を絡めると、セイラスは、ゆっくりこちらを振り向いた。翡翠色の奥に、諦めと甘さが入り混じった光が滲む。

「……メイカが、今みたいに可愛くねだるなら、許そう」

「っ、本当に……？」

「ああ……ただし、約束だ」

セイラスは立ち上がって、メイカの顎を指先でそっと持ち上げる。「これからも今みたいに甘えてキスをしろ。何か叶えてほしい事があったらそうやって可愛くおねだりするんだ」

その甘えた仕草は、どうやらセイラスの琴線に強く触れたらしい。メイカは自分からキスをしたはずなのに、不思議と嫌悪感は湧かなかった。むしろ、胸の奥がきゅっ♡と高鳴り、次はもっと上手く甘

えられそうな気がした。

セイラスは「わかったから……」と悶絶したあと、深く息を吐き、ようやく落ち着いた声を取り戻した。

「……下着や服はメイカが着れそうなものをいくつか見繕ってあるから好きなの選べ」

（やつぱり最初からあったんじゃない!!）

セイラスが私を膝から抱き上げ、力の入りきらない脚がふわりと浮き、腕の中へすっぽり収まる。抱き上げられた瞬間、昨日の出来事が蘇って、ドキドキ♡してしまう。

「自分で歩けます……」

「いい。私が運びたいし、イキまくってメイカも疲れただろう？」

耳元でこそつと意地悪を言われ、頬が一気に赤くなった。

「も、もう言わないでください……っ」

「では大人しく抱えられていろ」

寢室の隣の扉を開けると、ひんやりした空気と心地の良い香水の香りが鼻先をくすぐる。クローゼット中には、ハンガーには数着のドレスが整然と並び、引き出しには下着がきちんと揃えてある。

「すごい……」

思わず小さく声が漏れる。絹の光沢を抑えた落ち着いた色彩のものや宝石のように鮮やかなもの、レースがふんだんにあしらわれたものまで、どれも一目で高価だと分かる仕立てだった。

（なんか家で着るには豪華すぎない？今までとの落差に風邪ひきそう……）

「今朝、手配できた有り合わせだが……」

「いえ、着るものがあるだけで十分です！ー」

「サイズは気にするな。魔法をかけてあるから、袖を通せばメイカの体に合う」

（魔法凄すぎ……太ったから服着れないとかこの世界だとないのかな……）

「欲しいものがあつたら言え。メイカが着たいものは好きなだけ買ってやる」

「ありがとうございます」

「遠慮するな。この屋敷で暮らす以上、みすばらしい格好をさせるつ

もりはない。……私の側に置くのだからそれに相應しい姿じゃないとな」

「なんだか人間扱いされてる気はしないが、一応服は好きに選ばせてくれるらしかった。

「まあ、私も色々好きに着せたい。これなんかどうだ？きつとにあうぞ♡」

「差し出された服は背中がばっくり開いていて横からおっぱいが見えそうなデザインだった。

「いやですよ……横乳見えるじゃないですか」

「それがいいんだろう？可愛いぞ♡……今日はいいから今度はこういうやつも着てみないか？」

「ずっと着ません……もつと普通のがいいです……」

「自然にセクハラされた気がするがセイラスがしてもそう見えないのが不思議だ。むしろ断られ、はあ……とため息をつく姿が妙に色っぽく、背筋がぞくり♡と震えてしまう。

「そうですね……じゃあ、あの水色のドレスがいいです」

彼に変な服を着せられる前にと、私はクローゼットの中から淡い青空のような一着を指差した。

胸元と裾に、小さな鈴蘭の刺繍が可憐に咲いているロングドレスだ。

「鈴蘭か。少しセクシーさには欠けるが、清楚で君に似合いそうだ」
セイラスは機嫌よくクローゼットから色々なもの取り出し、ベッドの縁に腰掛けていた私の前に立った。

「じゃあ、着替えさせてやろう」

「えっ……自分で着られますから……っ」

「私がしたいんだ。君を買ったのは私なのだから好きにさせろ……」
有無を言わせない優雅な微笑みと共に、私の着ていたネグリジェが頭上へと引き抜かれた。

「ひゃっ……!」

呆然とする私をよそに、彼は繊細なレースのブラジャーを手に取って私の背後に回った。

「ほら、腕を通しなさい」

言われるがままに腕を通すと、冷たい指先が背中を滑り、手際よくホックが留められる。だが、彼の手はそのまま退くことなく、前へと回されて私の胸をふわりと包み込んだ。

「や……っ、むねっ、触らないで……っ♡」

「ダメだ。胸はしつかり寄せておかないと、美しくないだろう？」

もっともらしい言い訳を耳元で囁きながら、豊かな柔肉をむにゅり♡と下から掬い上げる。谷間を作るように中央に寄せる手つきは丁寧だが、親指の腹でわざとらしく何度も乳首を掠めていく。

「んあっ♡や……っ、くすぐりたい、です……っ♡」

少しずつ敏感な突起がつん♡と硬く立ち上がっていくのを感じながら、私はただ顔を赤くしてされるがままになるしかなかった。

「まったく……乳首をこんなに勃たせてはちゃんと収まらないではないか……」

呆れたような声色とは裏腹に、彼は楽しそうに指先で硬い粒をぴんぴん♡と弾いた。

「ひうつ！？それはセイラスさまが……！」

私の言葉には答えず、親指の腹でぐにゅっ♡と先端を押し込み、ブラにしまい込んだ。

「よし、綺麗に収まったな。次はパンツを穿こうな……」

純白のシルクのショーツを手に取ろうとした彼の手が、不意に止まった。

「あゝまったく……着替えさせているだけで、こんなにぐじゅぐじゅ♡に濡らしてしまっているのか。これでは下着がすぐに台無しになってしまうじゃないか」

「あ……っ、ちがつ、それは……っ♡」

恥ずかしくなり太腿を閉じようとするも、彼は私の開いた股の間に手を伸ばし、秘裂に指を這わせ、蜜液を拭い取った。

「何が違うんだ。ほら、糸引いてるぞ……」

「んっ……♡」

「否定しなくていい。エッチなことは悪い事ではないといっているだろう？それにそんな君にぴったりのものを用意してある」

いつの間にかセイラスは淡く光る小指くらいの細長い水晶のよう

なものを手にしていた。

「えっ!?!どこから出てきたの?」

「あはは、可愛いな。これくらい魔法ですぐ出せる……」

魔法で出されたその石を愛液が溢れ出ている、とろとろ♡の蜜口に直接あてがった。

「ひゃうっ!?! な、なに、これ……っ」

「君の愛液を吸収してくれる魔石だ。これなら下着を汚さずに済むだろう?」

石が粘膜に触れた瞬間、じゅわっ♡と周囲の蜜が吸い込まれていく。すると、硬かったはずの魔石が体温と愛液を吸って、人肌のように柔らかく形を変え、私の秘裂の隙間にぬちゅっ♡と密着してき

た。
「あっ!?!♡んあっ♡石、が……やわらかく……っ♡」

「いいだろう?しかもこれは魔力で遠隔操作ができるからいつでも君を可愛がれる優れモノだ」

彼が軽く指先を動かすと、魔石がブルル♡と微弱な振動を始め

た。

「あひっ♡ やあっ♡ 震え、て……っ♡」

抗議の声を上げる隙も与えず、彼はそのまま純白のショーツを下から引き上げ、スライムのようになった魔石を私の股間にぴとりと固定してしまった。

「ん……っ♡」

ショーツによって魔石が余計密着し、よりダイレクトに敏感なクリトリスをブルブル♡と震わせ続けた。

彼は薄く透ける白いストッキングを足先に被せ、太ももへと引き上げていく。

その手つきは普通なのに、股の間に仕込まれた魔石と相まって、シワを伸ばすように這う指先から滲む淫靡さに、私はただドキドキと胸を高鳴らせるしかなかった。

「ちゃんと綺麗に穿けたな。じゃあ、立ち上がりなさい」

促されて立ち上がると、いよいよ水色のドレスを上から被せられた。ひんやりとした絹の感触が心地いいはずなのに、ぬちゅぬちゅ

♡とした石の感覚が甘い疼きを広げる。

「最後は靴だな……」

私が再びベッドの縁に腰掛けると、彼は真っ白なレースアップのハーフブーツを履かせ、丁寧に紐を編み上げていく。

自分のために傳く美しい彼の姿と、秘所に淫らな塊を押し込まれている自分の状態に、とてつもない背徳感を覚える。

「……完成だ。見てごらん」

立ち上がったセイラスに手を引かれ、私は鏡の前に立った。

そこには、鈴蘭の刺繍が黒髪に映える、可憐なドレス姿の私が出た。

ふんわりと広がる裾は足元をやさしく隠し、きゅっと絞られた腰まわりが華奢さを際立たせている。ただ、着替えの途中で散々いじられたせいで、頬は林檎のように赤く染まり、瞳は情欲でとろん♡と潤んでいた。

（どうしよう……すぐくエッチな顔してる……。それに、股のあいだの魔石がずっとブルブルしてて……っ♡）

「……よく似合っている。美しいお姫様の誕生だな」

背後からすっぽりと抱きすくめられ、耳元で低く笑う声がした。

「これ……っ♡動かすの……やめて……っ♡」

恥ずかしさに身をよじって抗議すると、彼は鏡越しに私を見つめながら、指先を僅かに動かした。

ブルブルッ♡！

「ひゃんっ！？♡ あ、ああっ♡♡」

「そうだな。こんなに清楚で可憐な姿をしているのに、ドレスの下では私の魔石を咥え込んでぐじゅぐじゅ♡に濡らしているなんて……誰が想像するだろうな」

「セイラス、さま……っ♡ いじわる、しないで……っ♡」

「それは無理だな。しかし、そんな淫らで可愛い姿を見せられたら、庭になど行かず、今すぐベッドに押し倒してぐちゃぐちゃに汚したくなってしまう」

囁く声はどこまでも甘く、鏡越しに目が合った翡翠色の瞳は、獲物を狙うように熱かった。

「綺麗だ。……今日は、誰にも見せたくないな」

（そんなの……ずるい……）

意地悪ばかりされているのに、彼の熱を帯びた瞳と真っ直ぐな賞賛に、怒るよりも先に胸がぎゅう♡と甘く締めつけられてしまった。

扉の向こうから控えめなノックが響いた。

「失礼いたします。庭の準備が整いました」

老執事の穏やかな声に、セイラスはわずかに眉を上げる。

「もうそんな時間か」

そして、鏡の中で顔を真っ赤にして脚を擦り合わせる私へ視線を戻した。

「行こう。君に、屋敷の外を見せてやる」

「む、無理ですっ♡こんなの入ったまま、歩け、ない……っ♡」

「だめだ。後からたっぷりとイかせてやるから、それまで我慢しなさ

い」

意地悪く笑うと、セイラスは私の手をそつと取った。

指先はひんやりしているのに、触れられたところから熱が広がる。
「ほら。行くぞ、私の可愛いお姫様」

その一言で、私は絶望と羞恥に顔を赤く染めながら、彼の手を握り返すしかなかった。

連れて行かれた庭園は絵画のように美しく、色とりどりの薔薇が咲き乱れ、白い石畳の小道が迷路のように奥へと続いている。

「……きれい」

ぽつりとこぼすと、セイラスが横目でこちらを見た。

「気に入ったようだなによりだ。まあ……私からすれば花より君の方が、よほど目を引く」

「そ、そういうのいいですから……」

本当は美しい庭を楽しみたいがそんな余裕は私にはなかった。

魔石を膾口に仕込まれ、何をされるか分からず、恐怖と羞恥でパニックに陥っていた。

「あ……っ、んっ♡」

歩きたびに、ショーツの中に仕込まれたむにゅむにゅ♡とした魔石が私の秘所に、食い込んでくる。

それに加えて、隣を歩くセイラスが時折、指先を僅かに動かして遠隔操作で魔石の振動を強めたり弱めたりしてくるのだ。

（どうしよう……っ、足が、ガクガクして……っ♡）

「どうした？ 歩幅が小さいぞ」

セイラスは私の腰にしっかりと腕を回し、優雅にエスコートしながら涼しい顔で囁いてくる。

「セイラス、さま……っ♡む、無理です……っ、止めて、くだ……さいっ♡」

さすがのように彼の腕をきゅっとなぐりしめ、小声で必死に懇願する。しかし彼は私の涙目など気にも留めず、楽しそうに翡翠色の瞳を細めた。

「何を止めるんだ？ 私はまだ、君と一緒に庭を散歩しているだけだが？」

ブルブルッ♡！と急に股間にぴとり♡と張り付いた塊が激しく震えた。

「ひゃんっ！？♡ あ、ああっ♡」

柔らかいスライム状の塊が、震えながら敏感なクリトリスをべったりと包み込む。ダイレクトに叩き込まれる快感に、私はたまらず足を止め、水色のドレスの裾をぎゅっ握りしめた。

「だめ……っ♡ 誰かに、見られ、ちやう……っ♡」

辺りを見回すと、遠くの芝生で庭師が作業をしている姿が見えた。さらに小道の向こうからは、籠を持ったメイドがこちらへ向かって歩いてくるのが見えた。

（嘘、人が来る……っ！ こんな、顔真っ赤にして、股を震わせてるなんてバレたら……っ！）

「ほら、綺麗な薔薇が咲いているぞ。少し近くで見てもよいか」

「やつ、歩け、ない……っ♡ 足、動かないからあ……っ♡」

首を横に振るが、セイラスは私の腰を抱いたまま、強引に前へと歩かせる。

歩くと余計振動が身体に広がり、顔は赤らみ、足がピクピク♡と震えだす。そんな痴態を周りに、見られてしまうんじゃないかと気が気ではなかった。遠くから近づいてくるメイドの姿が、どんどん大きくなっていく。

（おねがい、止めて……っ！ 今だけ、止めてえ……っ！）

必死に息を殺し、顔をうつむかせようとする私を嘲笑うかのよう
に、スライムもどきが蠢き始めた。

ブルルルルッ♡！！

「あひいっ！？♡んんっ、あああ♡♡♡」

これまでとは比べ物にならない激しい振動が、スライムの塊を通して蜜口全体を容赦なく打ち据えた。限界を超えた快感に腰の力が抜け、私の口から隠しきれない甘い絶叫が漏れる。

（終わった……っ！ 絶対に、変な目で見られる……っ！）

快楽に染まっただらしない顔を顔を見られたくなくて、私はギ

ユツと固く目を瞑り、セイラスの胸元に顔を埋めた。

軽蔑するような視線か奇異の目みられると覚悟した。

しかし恐る恐る薄目を開けると、予想に反して籠を持ったメイドは私たちの真横を通り過ぎる際、ただ黙って深々と一礼をし、何事もなかったかのように奥へと歩き去っていくところだった。

「……え？」

私は呆然と瞬きをした。

あんなに大きな声で喘いで、腰を砕かせてしがみついているのに、彼女の視線に至って普通だった。

「……ふふ、縋り付かれるのは悪くないな」

頭上から、くすくすと忍び笑いが降ってくる。

見上げるとセイラスが意地悪く、三日月型に目を細め、私の耳元に唇を寄せてきた。

「安心したか？ 部屋を出る時、君に認識阻害の魔法をかけておいたんだ」

「……えっ？」

「他の連中には、君が上品に微笑んで歩いているようにしか見えていない。もちろん、その淫らで愛らしい声も、私と君以外誰にも聞こえていない」

種明かしに安堵や羞恥、色んな感情が湧いてきて言葉を失った。

「じゃ、じゃあ……私は……」

（無駄に恥ずかしい思いつてこと？）

「君がどれだけ股を濡らして喘ごうが、私以外には誰にもバレない。だから……」

「ひゃあ♡♡」

言葉と同時に、再び塊が狂ったように振動し始める。

見られていないという安堵と、明るい庭園のど真ん中で自分だけが卑猥な快感に溺れているという強烈な背徳感。

その二つが混ざり合い、私の頭は真っ白に溶かされていく。

「あ、あ♡♡ セイラス、さまっ……あ♡♡」

「ああ……いい子だ。そのまま歩けるな？ 向こうのガゼボで少し休もう」

足なんてとうに動かないのに、彼の腕に支えられながら、私は無理やり前へ引きずられる。

私は身悶えながら庭の奥にある白い東屋へと連れて行かれた。

テーブルには、すでに二人分の紅茶と焼き菓子を用意されており、紅茶からは湯気が立っていた。

「さあ、座りなさい」

セイラスに促され、私はガクガクと震える足で椅子に腰を下ろした。

「あっ……♡」

座った瞬間、体重によってドレスの下の塊が下からぐぐっ♡と押し上げられ、逃げ場を失ったスライム状の魔石は、私の愛液をたっぷりと吸い込み、完全に私の秘所の形に合わせて変形しきっている。「紅茶が冷めないうちに飲もうか。……ほら」

優雅にカップを傾けるセイラスの向かいで、私は震える手を伸ばして自分のカップを持ち上げた。

カチャカチャとソーサーが鳴る。まともに持つことすらできない

私を見て、彼が唇の端を歪めた。

「どうした飲まないのか？ 喉が渴いているだろう？」

その瞬間、股間に張り付いていた塊の動きが、唐突に変わった。
「えっ……？ ひっ、あああっ！？♡♡」

ただ震えて食い込んでくるだけだった塊が、突如としてチュパッ♡チュパッ♡と私のクリトリスを吸い上げ始めたのだ。

ちゅぱ……♡ちゅっちゅぷ……♡ちゅくくくくう♡

まるで舌が直接そこを舐め回し、強い力で吸引しているかのよう
な、生々しすぎる感触。

「やっ♡だめっ、すわ、吸われてるう……っ♡ あああっ♡♡」

「行儀が悪いぞ、メイカ。はたから見れば優雅にお茶を楽しんでいる
清楚な令嬢そのもののものに……それがドレスの下では……ただの石
ころに卑しい媚肉を吸われて、ぐじゅぐじゅと下品な汁を垂れ流し
て……」

「あひいいいっ♡♡む、無理っ、い、いっちゃ、いっちゃううっ♡♡」

彼が嗜虐的な言葉を囁くたびに魔力が塊へと流れ込み、ズズッ♡ズチュッ♡とさらに強い力で敏感な蕾を吸い上げてくる。

私は持っていたカップを落としそうになり、慌ててテーブルに置いた。

両手でテーブルの縁を力いっぱい掴み、腰を浮かせようとするが、吸い付いたスライムは私の動きに合わせて形を変え、絶対に離れようとしないうとしない。

「いい眺めだ。遠くで庭師たちが汗水垂らして働いているというのに、君は明るい白昼の庭園で、発情した雌犬のように股を震わせている。実に淫らだな……」

「あ、あ、あっ……♡♡♡ セイ、ラス、さまっ……♡♡ おかしく、なるっ♡」

「今夜は初めてのだからな。私が君を抱く時、少しでも痛くないように……こうして魔石で、ナカまでとろとろに、ほぐしておいてやっているんだ。感謝してほしいくらいだ」

「あぁっ♡♡ ひんっ……♡♡ ほぐれ、てるっ♡♡ もう、じゅうぶん、ほ

ぐれ……っ♡」

「いや、まだ足りないな。ほら、私の魔力が注がれるたびに、君の卑猥な穴がヒクヒクと勝手に開閉しているぞ。そんなに石に犯されるのが気持ちいいのか？」

「ちが、うっ♡ 違うのっ……♡ あああっ♡♡」

微笑んだまま言葉責めを続けるだけで、魔石の吸引力はどこまでも暴走していく。

魔法で隠されていると分かっているとしても、すぐそばに人がいる外の環境でこんな痴態を晒しているという圧倒的な羞恥心が、逆に快感を何倍にも膨れ上がらせてい

「あっ……う、私、もう、イッちゃうう……っ♡」

「ああ。私が今夜、君のその穴にたっぷり種を注ぎ込むことを想像しながら……無様にイキなさい」

魔石の吸引が限界まで強まり、クリトリスを根元から引っこ抜くように吸い付かれ、凄まじい刺激が襲いかかった。

「あああああッッ……！！♡♡♡」

ビクンッ、ビクビクンッ!!…♡

椅子から腰を浮かせたまま、私は全身を弓のように反らせて強烈な絶頂を迎えた。

ガクガクと痙攣する太腿の隙間から、堪えきれなくなった透明な蜜が大量に噴き出した。

「はあっ、あっ……♡ あ、あ……っ♡」

目の前が真っ白になり、私はよだれを垂らしたままだらりとテールブルに突っ伏した。

魔石はまだチュウッ♡と余韻を味わうように弱く秘所を吸い続けており、ビクビクと痙攣が止まらない。

「いっぱいイけて偉いな……いい子だ。これなら今夜、私のモノを根元まで呑み込んでも痛くないだろう」

セイラスは優雅に紅茶をすすると、完全に快感で蕩けきった私の頭よしよしと優しく撫でた。